
とあると灼眼と魔法少女

K太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあると灼眼と魔法少女

【Nコード】

N2181U

【作者名】

K太

【あらすじ】

一つになってしまった世界で巻き起こる様々な事件。

彼らは守る為救う為、剣を振り杖を取り拳を握る。

主人公達の邂逅はきつと新たな物語を作り上げるだろう。

幻想殺し、炎髪灼眼、魔法少女、異なる世界が交差するとき壮大な物語は始まる！

3つの話をゴチャゴチャにしたらどうなるかという馬鹿な話です。それでもいい方は読んでください。

タイトル変更しました
でも原作のタイトルを繋いだだけです

プロローグ（修正）（前書き）

ようやくこの小説を投稿できました

基本的に授業中に書いてるのでクオリティーの低さは目を閉じてください

ではござい

プロローグ（修正）

イタリアにおける「女王艦隊」事件より数日。

学園都市の高校生、上条当麻は教室の机に座り午後の眠気と戦いながらじつと黒板を見ていた。この時期に制服の夏服というのは若干肌寒いが、食後の眠気がそれを凌駕していた。

「ここでこのイオン式がですねー・・・」

そもそも上条はイタリアでの怪我がまだ完治しておらず腕に包帯を巻いている。が、こんなことはしょっちゅうなのでクラスメイトは全く気にしない。

「ですので、ここの答えを・・・、むむむ。上条ちゃん、聞いてるのですか？」

上条が眠気に堪えている横、隣の席では土御門がごく普通に眠っていた（サンガラスで解りづらいが）。このクラスメイトは多角スパイとして学園都市にいるはずなのだが、これを見るととてもそんな大層な者には見えない。

「上条ちゃん。ちゃんと聞いてないと、居残りさせますよー？」

まあ、そんなことは上条にはどうでもよかった。ただ単純に、授業もお構い無しに眠っているバカにイライラしていた。上条は今すぐにも殴りたい衝動を抑え、一つ心に決め黒板の板書（意味不明な記号）に向かう。

（後でぶん殴ってやる）

「上条ちゃんは居残りですね」

「なっ！？先生、こいつ寝てますよ。こいつは！？」

「何言ってるんですか？土御門ちゃん起きてるじゃないですか」

「えっ？」

上条はこの小学生教師に向いていた視線を隣に移した。

「にゃー。カミヤん、俺は起きてたぜい」

「うそつけ寝てただろうが！」

「何のことかにゃー」

「はいはい、上条ちゃんは後でお説教ですなー」

「えっ！？マジですか！」

「マジです」

「ざまあないぜ」

「土御門ちゃんもですよー」

「にいにー!？」

上条は疲れ果てたようなため息をつき呟いた。

「あー、不幸だ・・・」

上条はいつものように口癖を呟く。

この後さらに誰も知らない不幸が起きることを上条は全く気付かない。
い。

海鳴市桜台。

住宅街から離れた小高い丘に小さな広場がある。休日になればピクニック等でちらほらと人影が見えるのだが、今は平日の朝。そのまばらな人影もない。

そんな中、広場の中心に立つ一人の少女がいる。茶色い髪を二つにまとめたツインテールの少女で、目を閉じ見えない何かを意識を集中させている。

高町なのは。少し前までは普通の少女だったが、数ヶ月前に起きたある事件において魔法の力を手にした。なのはの意識の先は自分でコントロールし真上を縦横無尽に舞う桜色の閃光、魔力弾にある。

「良いできです、マスター」

一人以外誰も居ない広場に機械的な女性の声が発せられた。(注
デバイスの台詞は本来英語もしくはドイツ語ですが、作者はそんな
ことできないので「」をデバイスの台詞と区別します。ホントすん
ませんm(——)m)

インテリジェントデバイス・レイジングハート。先の事件をなのは
と共に戦い抜いたパートナーだ。

「ありがとう、レイジングハート」

なのはは微笑みでパートナーの称賛に応えた。

「じゃあ、ラスト！」

その声に合わせて魔力弾が動きを変え、大きく旋回し高度を下げる。
すると元々魔力弾があった場所から空き缶が落ちてきた。始めの段
階で魔力弾によって上空に弾かれた缶がなのはの前に落下し、
カーンッ

なのはの後方から迫ってきた魔力弾に弾かれた。そのまま缶は前方
のごみ箱へと向かい

カーンッカーンッ

ふちに当たり外へと弾かれた。

「ありやりや・・・」

「気にしないで下さい、マスター。よかったですよ」

「そうかな？どれくらい？」

「80点くらいです」

「そっか」

そんな会話をしながら帰路に着くなのは。朝靄に包まれた街は静寂
さを表し平和な街を演出する。しかしそれは少しばかり違う。

半年前、この街では一般人に知られることなく1つの大事件が起き
ていた。ブレシア・テストロツサかつて大魔導師と呼ばれた者が、ジュエルシー

ドという危険なロストロギアを求め

なのははこの事件を解決に導いた一人だ。そしてその時に繋いだ絆
を胸に魔法の訓練に励んでいる。

そして、再会はもうすぐ叶おうとしている。

本来とは違う形のまた違う形で。

—————

ミサゴ祭から数日後、テスト返却後の午後の授業。

”ミステス”の少年坂井悠二は授業になかなか集中できずにいた。ミサゴ祭の際行われた”探耽求究”ダンダリオン通称教授の実験の時に、悠二はクラスの中でも親しい友人、吉田一美、佐藤啓作、田中栄太にその正体既に死んでしまった坂井悠二の残り火、代替物”トーチ”であることを知られた。

しかし彼らはその後もいつもと変わらない態度で接してくれた。悠二にはそれが嬉しかった。いつもと変わらない日常を送れることがとても嬉しかった。

(吉田さんは本当のことを知っても僕を好きだと言ってくれた。ここにいる僕は人間だって)

突然衝撃的なことを数多く知り混乱していたにも関わらずしつかり悠二に向き合ってくれた。悠二には二度と手に入らないと思ったものをもう一度手にした気がした。

(僕にも居て良い場所が、帰る場所ができたってことなのかな。でも・・・)

横を見るとそこには、授業にも関わらずノートも教科書も出さず腕を組んで静観する小柄ながら全く弱さを感じさせない威厳を持つ少女がいた。

(いつかシャナと一緒にこの街を出る日がくる。その時僕は)

”フレイムヘイズ”炎髪灼眼の討ち手、その名前はシャナ。

フレイムヘイズという役割と炎髪灼眼という識別の名しかなかった少女に悠二が付けた呼び名。それも今では平井ゆかりのあだ名としてクラスに認知された。

（どちらかを選べるんだろうか。そもそも選ぶ資格なんてあるんだろうか？）

自らの決心が揺らぐ様な思いに戸惑いながらも、まだ時間は十分にあると一旦忘れることにした。

今は期末試験の前、学生の本分に力を入れることにする。

（放課後は佐藤の家で勉強会するって約束したしな。少しっくらい巻き返せるといいんだけど）

そう思い直し授業に気を向ける。

だがまたすぐに新しい異変に戸惑うことになる。

歴戦の”紅世の王”すら驚愕する事態に。

科学と魔術と、紅世の炎と、魔法の力

異なる基からできた力が交差しぶつかり混じるとき、誰も知らない物語が始まる！

プロローグ(修正)(後書き)

クロスしてねー！！！！

すいませんm(____)m 次回もクロスとは言いづらいです
本格的に邂逅するのはその次からです・・・

異変（前書き）

邂逅パーティーって感じですよ

異変

補習が決まりぐったりしていた上条が異変に気付いたのは、隣にいる土御門の雰囲気が変わったからだ。

ガタツと突然立ち上がる土御門。

「土御門？いきなりどうした？」

「カミヤん、話は後だ。すぐ右手をあげろ！」

普段の様子からは考えられないような激しい、魔術師の口調から冷静さを欠いたような声に上条は戸惑う。

「どうしたんだ土御門。なにをそんなに……」

そこで上条も異変に気付く。誰もこっちを見てないことに。

(なんで……)

誰も何も言わないのか。授業中にいきなり立ち上がって話してるのに、クラスメイトは疎か教卓にいる小萌先生まで何も言わない。

「なんで……おい土御門！」

「早くしろ、カミヤん。時間がない、俺達も巻き込まれるぞ」

「ああ……わかった」

時間がないと言われた以上それに従うしかない。

グツと右手を掲げるようにあげる。上条の右手”幻想殺し”は異能の力ならなんでも問答無用で打ち消す力を持つ。原理など細かいことはわからないがその力は、十億ボルトの電撃や3000の炎さえ防いだ。

(土御門がここまで焦るってことは大規模な魔術的なもののはずだ。でもいっただい……)

そこまで考えたとき、決定的な異変が起きた。

ドongoツゴongoツゴongoツ

いきなり地面が叩かれたような大きな揺れが襲った。

「っお!？」

立ってることもできなくなり床に転がる上条。

「カミヤん!くそっ」

土御門は幻想殺しの影響から外れたのを感じ急いで結界の陣を作り上げる。

「っ!?!なんだ!地震か!？」

上に意識を向けていたところに不意打ちのように下からの揺れを受けた上条は、事態を把握しようとする。

そこで異様な光景を見る。

「な何が・・・」

上条たちのことを気にも止めなかったクラスメイトはこの揺れにも無反応だった。

ただそれだけではない。何一つ動いていない。

地震で揺れるものもなければ倒れるものもなく、ましてや騒ぎ立てるものもいなかった。

まるで揺れなど無いように、普段の日常が流れている。まさに異常。

「くっ」

上条は気が狂いそうになった。まるで自分だけ知らない場所にほうり出されたような気がした。

だが異変はさらに続く。周りが少しずつ変わり始める。

ものが別のものに変わっていく。崩れて砂のようになり違うものに組み換えられていく。

人も物も変わるものと変わらないものがあるが目では追いきれない。

その中で土御門は青白い光に包まれ影響から逃れているようだ。

耐え難い光景の中に上条は、自分と同じようにこの状況に目を向ける少年を見た。

—————

授業が終盤を向かえたころ、悠二の鋭敏な感覚がある反応、自在法

のようなものを感じとった。自在法のように少し違う。自在法に何が混ざったような、何かに自在法が混ざったようなそんな感覚。

「……封絶」

悠二と同じくそれを感じたシャナは小さく呟き封絶を張った。そして炎髪灼眼を纏い戦闘体制を取る。

「シャナ！」

「悠二下がって」

悠二に応えながら周りを警戒するシャナ。悠二は素直に従った。

「おいおいどうしたんだよいきなり」

「この封絶だっけ？シャナちゃんがやったのか？」

「これはいつたい……、坂井君、シャナちゃん？」

突然のことにそれぞれ疑問を口にする三人。彼らは紅世の事情を知りそれに関する品を持つことで封絶の影響を受けていない。

「そうか、吉田さん封絶見るのは初めてなんだ」

「は、はい……」

「悠二、そんなの後。何か来る。構えて」

そういうシャナは視線を上に向け大太刀『贄殿遮那』を握っている。

悠二も上から何かが来ることはわかっており身構えた。

しかし

ドongoッゴッゴッゴッゴ

異変は下、足元から襲ってきた。上からきた力が大地を震わせるという形で。

「……っ！？封絶が効かない。素通りして地面を揺らしてる!?!」
シャナが自らの感覚で推測する。悠二も同じものを感じていた。自在法を含む正体不明の力が封絶の影響を受けず地面を揺らしているようだ。

「きゃっ!」

「わぁっ」と

いきなりの揺れに倒れかけた吉田を支える悠二。

「シヤナ！これって・・・」

「ダメ、封絶じゃ防げない。なんとか耐えて」

「耐えてって・・・」

悠二は宝具『アズユール』以外の防御手段は持っていない。その『アズユール』さえ紅世の炎を防ぐことしかできない。無論『アズユール』でこの揺れを防げるはずがない。

悠二がそう考える間にも新たな異変が起こる。

封絶の影響で止まった人やものが少しずつ崩れ始めたのだ。そして崩れたものが再び形をとり全く違うものに変わっていく。クラスメイトが知らない生徒に変わる、窓の外の景色が変わっていく。全てを目で追うことはできない。

自分の知る世界が変わっていることに、しばらく理解が追いつかなかった。

――――

学校からの帰り道、なのはは一人で街を歩いていた。アリサとすずかは習い事があるらしく学校で別れた。

「〜」

フェイトとの再会を心待ちとするなのはは上機嫌だ。

だが、

「マスター、魔力反応です」

レイジングハートの声で日常は非日常に変わる。

「えっどこから!？」

「上です。接近中、防御を」

戸惑いながらレイジングハートに従い腕を上げて桜色の防御魔法を張る。

そして、

ドンゴゴゴツゴゴツゴ!

見えない衝撃が街を襲う。それは地面を揺らし震わせた。

「これって!」

なのはの驚きにレイジングハートが答える。

「次元震に酷似しています。最低でも中規模以上」

「そんなっ!」

声を上げながらも懸命に防御魔法をコントロールする。だが個人の魔法で災害レベルの次元震を何とかできるとは思えない。大地を震わすほどの重圧がなのはの小さな魔法陣を押し。時間の問題だ。それだけではない。

やがて辺りも様子も急変する。様々なものが少しずつ崩れその形を変え始めた。

「いったい何がどうなって・・・」

戸惑うのはだが、ここで防御の魔法陣に魔力以外のものが当たっていることに気付いた。それも最低でも2つ。この複数の力が互いに影響しあい複雑に雑じりあい、この現象を引き起こしている。しかしわかったところではなにはこれを防ぐ手段はない。

(いきなり次元震だなんてどうして・・・、どうすればいいの!)

* * *

しばらくたち異変と揺れはおさまった。

幸いなのはは防御魔法で耐え切れ影響を受けずにすんだ。

だが、周りの様子を見るにそれはなのは一人。街にはビルが増え、見たことのない制服をきた少年少女が道を歩き、それらを誰も気にせず進む。

異常と思わないことが異常。

そして大きな見えない変化を感じていた。

「マスター、魔力に酷似した反応が3つ。正体不明の力が周辺に微

量に充滿しています」

「うん、揺れて途中でビルとかができたときからだよね」

「はい」

なのは少し考え

「行ってみよう。何か知ってる人がいるかも知れないし」

そういうと力の集まる場所に駆け出した。

* * *

「あれ？道間違えちゃったかな」

反応を目指すなのはだが、変わった街で道がわからなくなっていた。

「ここ曲がってみようか」

そういつてなのはが道を曲がったとき

ドンッ

「わあっ」

「きゃっ」

反対から来た人にぶつかってしまった。

「ごめん、大丈夫？」

「あ、はい平気です」

差し出された彼女の手を掴み起き上がり

「全くついて無いわね」

「（微弱な力の放出を確認）」

その姿を良くみる。

「こんな女の子にぶつかって」

茶色の髪に花のヘアピンを付けた制服のサマーセーターの中学生だった。

「街の様子なんてまるつきり変わって、もうなんだって言うのよー

！」

――――

しばらく揺れがおさまったとき悠二たちが見たものは

- しばらくして上条の目に入ったのは

封絶の中をもものともせず動く2人の少年

- 不思議な紅色のドームと動かない人達

一人は金髪のサングラスで不敵な笑みを見せ

- その中で動きを見せ上条と同じように周りを見回す少年少女

そしてもう一人、悠二たちと同じく呆然とし尻餅をついてシャナを見る

- そしてもう一人、隙のない構えで刀を手にする

ツツツ頭の少年だった。

- 燃えるような髪と眼をした少女だった。

異変（後書き）

なんか文章が味気ない
そして短い
だめだなあorz

出会い 幻想殺しと炎髪灼眼（前書き）

できた・・・できてしまったテスト前

前回感想で誤字の訂正頂きました

他の人も見つけたら教えてください

やっとクロスオーバーっぽくなります

出会い 幻想殺しと炎髪灼眼

対峙する炎髪の少女シヤナとツンツン頭の少年上条。

シヤナは起きた現象にとらわれることなく、敵と思われる少年を警戒し一瞬の隙も見せないように構えている。

一方、上条は今だ冷静な思考をすることができず混乱していた。

しかしそれは上条だけではない。シヤナの後ろにいる吉田に佐藤、田中そして悠二までもが状況を理解できず困っていた。

そんな中唯一冷静な思考を保ち状況を分析していたのは土御門だった。土御門は現れた少女やその後ろにいる悠二達だけでなく、周りの様子から少女達が何物なのか考えていた。

「おい、この紅い結界みたいなやつ張ったの赤髪のお前か？」

声をかけられたシヤナは目の前の上条から意識を離さずに視線だけで土御門に伝える。

「封絶のこと？なら私が張った。できる限り目立つような戦闘は避けたい」

刺すような歴戦のフレイムヘイズの威圧になんら臆すことなく土御門は続ける。

「封絶か、知らない術式だな。聞いたこともない。まあ戦闘の意思がないなら刀を納めてほしいにゃー」

「どういうこと？」

「どういうものにも、こつちにも戦う気はないってことだぜい」

「それを信じろって言うの？」

「無理だっけというならべつに構わないにゃー。それでもお互い情報は少しでも多く必要だろ？それだけでも剣を引く理由には十分だと思っにゃー」

その言葉にシヤナは考え込むように黙り自分の契約者に声をかける。

「アラストール」

「うむ。そやつ言うことも一理あるう。なにわからぬまま無闇

に動くのは得策ではない」

突然の声に驚く上条と土御門。

「ペペンダントが喋った!？」

「通信霊装、ともなんか違うにや。まっそれも後でじっくり聞かせて貰うぜい」

シヤナは敵意のない声と認識し警戒を解き炎髪を黒髪に戻した。それを確認し土御門が告げる。

「なら放課後にここの屋上でにや。カミヤんも来た方がいい。事態を正確に知っていないとまずい」

今だ床に尻餅をつく上条に声をかけ、そして悠二達へ向かい

「そつちのも知りたいなら来てもいいぜい。何もわからないのはつらいだろうからにやー」

そう告げると土御門はポケットから包帯を取り出し脇腹に巻き始めた。魔力を使い結界を張った影響だ。

超能力者に魔術は使えない。そのことについて何も知らないシヤナや悠二達はいきなりの負傷に驚きを見せた。

「ん?ああ、そんなに驚くことないにやー。これも後でちゃんと説明してやるぜい。それよりこの封絶ってやつ早く解いとけ。いつまでもこのままってわけにはいかないだろ」

なんでもないように言う土御門に戸惑いを感じながらも封絶を解こうとするシヤナ。そこで上条がこんなことを言った。

「おい土御門、放課後って俺達補習じゃなかったか？」

「うまく逃げるしかないにやー」

「マジかよ。不幸だ・・・」

悲痛な声を上げる上条に合わせシヤナは封絶を解く。紅色のドームは消え周りに動きが戻った。

「あれ?皆さんどうしたですか。まだ授業中ですよー」

教壇に立っていた教師、見た目小学生の小萌先生が席を立っている面々に声をかける。

「あ、えっとすいません。なんでもないです」

そう言つて席に着く上条と土御門。小萌先生の姿にこれまでに無い驚きを見せた悠二達もそれに続き座つた。

* * *

午後4時半

今だ校内に残る生徒で賑わう校内を補習から逃れた上条と土御門は屋上に向かつていた。

「なあ土御門、今これ何が起きてるんだ？それにあいつら」

「俺にもわかんないにゃー。だから今からそれを聞きに行くんだぜい」

そう言つて先を進む土御門は屋上への階段を上がつていった。上条もそれに続く。そして中段辺りまで上がったとき突如視界が紅色に染まる。

「これって」

「あいつが言つてた封絶つてやつだな。これについても聞いたかないとにゃー」

土御門は気にした様子もなく上がっていく。上条は土御門さえ知らないものに注意を向けながら後に続く。

そして土御門は屋上に続くドアの前に立ち上条に話し掛けた。

「カミヤん、あいつらに何を聞かれてもカミヤんは正直に話せ。後は俺がなんとかする」

「わかつたけど、なんで？」

「カミヤんがああ赤髪に嘘がつけるとは思えない。なら無駄に警戒されるようなことはしない方がいいんだぜい。でも”幻想殺し”のことは隠せ」

「正直に言わなくていいのか？」

「まだあいつらが敵じゃないって決まつたわけじゃない。手の内は隠しとけ」

「・・・ああ」

自分と変わらないような少年達を疑うのに抵抗はあるがとりあえず従うことにする。

土御門は上条の返事を聞きドアを開けた。

「悪いな、遅くなったぜい」

外にいたシャナ達にそう言っで軽く声をかける土御門。

「そんなに待ってないから大丈夫だよ」

「一応封絶は張っておいた。一般人に聞かれることはないはず」

そう言うのは悠二とシャナ。その後ろには他の3人もいる。

「じゃまず自己紹介と行こうぜい」

土御門は悠二達に向かいそう宣言した。

* * *

各自、自分の名前を名乗り終わったときまた土御門が口を開いた。

「そつちは今がどういう状況かわかってるかにゃー？」

「どういう状況って聞かれてもな」

いまいち理解できていない田中は困った返事をする。

「シャナちゃんが封絶張って地震が起きて、気付いたらこの状況だ」

「そうそんな感じ」

佐藤の簡単な説明に田中は便乗した。

「だいたい俺達と同じか」

「その地震の前に何か力を感じなかったかにゃ？上から来たと思うんだが」

「あつた。直前に大きな存在の力と他の力が混ざったような力」

応えるシャナに上条が聞く。

「存在の力？」

「全てのものにあるその存在を支える力のこと。うまく操ればこんなこともできる」

そう言うとシャナは手に炎を作り出した。

理解できないという顔をする上条に土御門が補足説明する。

「俺らの言う魔力と同じようなもんだにやー」

今度は悠二が土御門に聞く。

「魔力つて魔法が使えるつてこと？」

「正しくは魔術だけにやー。まっそんなもんだ。そっちのシャナちゃんみたいに見せられるといいんだが、あいにく俺は魔術は使えない」

「えっ？」

「超能力者に魔術は使えない。強引にやれば使えるんだが体中ズタボロになるにやー」

腹をめぐり包帯の巻かれた脇腹を見せた。

「あの時の？」

「ああ、影響受けないように結界を張ったんでこの様だ」
ため息をつくように服を戻す。

すると吉田が声をかけた。

「その『能力』つて何ですか？ここに来る前に何回か教室で聞いたんですけど」

「それか。カミヤん説明できるかにやー？」

「いいけどなんで俺なんだ？お前が説明した方がいいだろ」

「裏の事情まで知ってる俺より、普通に過ごしてるカミヤんの説明のほうがわかりやすいと思うぜい」

そういうもんか、と上条は納得し吉田達に説明を始めた。

ここ学園都市では能力開発が行われ、学生は全員それを受けていること。能力の強さでレベルに分けられ、学生の6割はあまり能力がないのと変わらない『無能力者（LEVEL0）』だということ。

『超能力者（LEVEL5）』は7人しかいないこと。風紀委員やアンチスキル スキルアウト 警備員、武装集団など学園都市の常識と言えることを説明していた。

「へー、面白いな学園都市って」

「能力か、俺でも使えるようになるのか？」

「多分できんだろ。普通のやつなら、紙コップ動かせるくらいの力は持てるはずだし」

「紙コップって・・・。何に使えんだよ」

悠二がそう呆れたとき、今まで何か調べていた土御門が声をあげた。

「やつぱりな。嫌で面白い仮説が当たったもんだぜい」

「どうしたんだ、土御門」

「全員これを見ってみろ。面白いことになってるぞ」

そう言っつて土御門が見せるのは何かの地図。

「学園都市のマップ？」

学園都市全体を表した地図のようだが、上条は疑いの眼で土御門を見る。

「おい土御門、これホントに学園都市のマップか？」

「すごいだろうカミヤん。これもさっきの揺れの影響だ」

「すごいなんてもんじゃないだろ。なんで学園都市に”海”があんだよ」

上条の言葉に吉田が尋ねる。

「何かおかしいんですか？海があると」

「学園都市は東京の西部内陸にできた街だ。海なんて学園都市の学生が1番縁の内陸場所だにゃー」

土御門の補足に悠二は目を見開き、佐藤と田中は呑気に話し出した。

「御崎市にも海ないよな」

「結構遠出しないと見れないからな」

その話を聞いて土御門は唐突に笑い出した。

「ハッハッハ、こいつは本当にすごいことになってきたぜい」

「なんだよ土御門。何回わかったのか？」

笑う土御門に対し、悠二は少し戸惑うように呟いていた。

「そういうことなのか？でも・・・」

「おっ、坂井は気付いたか。お前意外と鋭いんだにゃ」

何のことかわからず首を傾げる4人に土御門はこう告げる。

「本当にすごいんだぜい。なぜならさっきの揺れで

異世界同士が1つになったんだにゃー。それも最低3つ」

.....。

「は？どういうことだよ、わけわかんねえよ。異世界ってなんだよ
「じゃあまず異世界の説明からにゃ」

突然のカミングアウトで軽くパニックになっている上条を無視して
土御門は続ける。

「異世界ってというのは、自分のいる世界と違う世界のことだにゃ。
ここまでわかるか？」

「この世界に対する”紅世”とかそういうやつか」

「その”紅世”っていうのがどんなのか知らないけど、多分それは
違うぜい」

「えっじゃあ・・・」

「簡単に言つと俺達がもともといたところに対する、坂井達かもと
もといたところって感じかにゃー」

「はっ？どういうこと？」

予想と全く違った言葉に驚く悠二だが、土御門は続ける。

「昔の奴らも面白い言葉を残したもんだぜい」

「面白い、言葉・・・？」

不思議そうに聞く吉田の声に土御門はその言葉を告げる。

「物語の数だけ世界がある」

意味のわからない言葉に全員首を傾げる。

「ただの例え話だぜい。俺も世界の裏まで知ってるが”紅世”なん
て聞いたことがない。坂井達もある程度”紅世”については知って

るみたいだが、能力や魔術なんかは知らなかった」

確認をとる土御門に頷く悠二。

「基盤が違えば物語も変わる。そういう話だにや。まあ大きな騒ぎがないってことは、こりゃ自然現象っぽいぜい」

「自然現象？」

「誰かが何か狙ったにしてはそのあとの動きがない。隠してるなら大したもんだが、それはなさそうだ」

そう説明を締め括った土御門は改めて悠二達を見た。

「さてと」

その声は口調こそ変わらないものの、鋭く冷たい魔術師のものだった。

「こうなった以上話してやる。この世界の裏側、魔術サイドについて。だからそつちも話せ、その”紅世”とか封絶とか全部」

シヤナに向かいそう話す土御門。

「アラストール」

「うむ、そやつの提案にのるとしよう。ある程度知っておかねば、

この先対処できぬからな」

「うん」

契約者の了解を受け、シヤナは土御門を見据え言う。

「わかった。話してあげる。”紅世の従”とフレイムヘイズのこと。

この世界の本当の事」

まず1つ

幻想殺しと炎髪灼眼、ミステス

この出会いが物語の歯車を少しずつ動かす

出会い 幻想殺しと炎髪灼眼（後書き）

設定集

この作品の吉田さんはカムシンからブレスレットもらってる設定です。

物語の数だけ世界がある、は電撃学園RPGから使いました。

出会い 魔法少女と超電磁砲（前書き）

邂逅パート2

出会い 魔法少女と超電磁砲

街角で女子中学生、御坂に出会ったのははぶつかったことについて謝っていた。

「ごつごめんさいよそ見してて。大丈夫ですか？」

そんななのはに御坂は気にした様子もなく応える。

「いやいや、いっていいってそんな謝らないで。私も結構慌てたし。あつ私は御坂美琴、よろしく」

気にしてないっていうより、小学生が頭を下げていることに若干申し訳ない気持ちでいた。

「えっと私、高町なのはっていいいます」

周りの通行人はちよくちよく2人を見ていくのだが、互いに名門校常盤台中学と聖祥大附属小学校の制服である。注目はするが近寄り難い雰囲気足を止めず去って行く。

「そっちこそ大丈夫なの？足とか怪我してない？」

「私は大丈夫です。それよりえっと、御坂さん」

「ん、何？」

どこか戸惑い不安な表情で呼ぶなのはに御坂は笑って応えた。しかし次の言葉で御坂の表情もなのはと同じ戸惑いと不安に染まる。

「さつき街の様子が変わったって言ってたけど、御坂さん何か知ってますか？今の状況とか」

「えっ」

突然のことに目を丸くする御坂、だが気を引き締めて逆になのはに聞く。

「そっち、えつとなのははわかってるの？道が変わってたり知らない制服の人がいたり」

「はい。でもみんな気付いてなくて普通にしてるみたいです」

「どうも気が付いてないんじゃないかと最初からこうだったって思い込んでるみたいよ」

「そうなんですか」

「そこまで情報を照らし合わせたところで御坂はホッと胸を降ろした。「はあよかったー。私だけじゃなかったのね。なら私も小学生なのはだって大丈夫なんだから、あいつは絶対大丈夫よね」

「あいつ？」

「多分この状況をしっかりと理解できて、もしかしたら何か知っているかも知れないやつ」

「心当たりがあるんですか？」

「まあね。あの馬鹿、いつもはすぐ見つかるくせになんでこういう大事なときにはいないのよー！」

「ちなみにあの馬鹿は学校の屋上にいるのだが、御坂にそれを知る術はない。」

「にやはは・・・えっと、その人は御坂さんのお友達なんですか？」
「なっ」

「なのはからすれば御坂の口ぶりから何気なく聞いたのだが、御坂にしてみれば少し思うところがあり、友達ではないけどでも、という微妙な自分の心を隠そうとした。」

「わっ私とあいつが友達なわけじゃない！あいつはム力つくやつで、私の相手をまともにしなくて腹立つやつで、でもちよつとかつこよ・・・ちがうちがう！あいつはその・・・あの・・・そう、倒さなきゃいけないやつなのよ！宿敵なのよ！！」

「えっあ、そそうなんですか」

「そう！そうなのよ」

（御坂さん、そんなに赤くなつて言っても全然説得力無いよ）
あたふたと言いつくをする御坂になのはは優しく微笑みかけ、とりあえずこの話を切り上げることにした。

「ということは御坂さんさっきまでその人のこと探してたんですか？」

「だいたいなんで・・・へっ、ええそうよ」

「じゃあ私も一緒にその人探してもいいですか？」

「別にいいけど、なんで？なのは誰か探してたんじゃ無いの？」
なのはの提案の理由がわからず聞き返してしまう御坂。

「私、今の状況の原因がわかる人を探してたんです。御坂さんの探してる人原因知ってるかも知れないですよね」

「少なくとも私よりは知ってると思うわ」

「なら私も何も知らないまま探すより、その人探した方がいいんじゃないかなって」

「うーん・・・。まあそれもそうね。いいわ、一緒に探しましょう
少し考えるそぶりを見せたが心良く承諾してくれた御坂になのはは
感謝する。」

「ありがとうございます、御坂さん」

「いいのよそんなの。それよりなのは」

「はい？」

「私達何人いるかもわからないちゃんと言わかってる同士でしょ。長い付き合いになるかもしれないし、そんな固くならなくていいのよ。力抜いて、私達もう友達でしょ」

「うわー、ありがとうございます」

「はいはい。じゃあ行きましょ」

そういつて笑い合い道を歩く2人はまるで姉妹のようだったという。

* * *

「そういえばなのは頭はどんな感じ？」

「えっ、頭？」

2人でしばらく上条を探していたとき、いきなり御坂がなのはにそう聞いた。

「えっと、そうじゃなくて、記憶っていうかなんていうかそういうのに違和感とかない？」

「記憶に違和感？うーん」

考え込むのはだが特に心当たりはない。そもそも何が違和感なのかもわからない。

「違和感ってどんな感じなんですか？」

「そうね、見たことのないはずのものに見覚えがあったり、知らない場所のこと知ってたたり」

「よくわからないけど多分大丈夫です」

「そう。じゃあ私だけか」

「御坂さんは何か違和感あるんですか？」

「少しね……。ねえなのは、その制服どこの学校の？」

「これは聖祥小学校です。知ってるんですか？」

「知らない……。はずなんだけどね。聞いたことある気がするのよ。ハアとため息をつく御坂。今度は逆になのはが聞く。

「御坂さんはなんていう学校なんですか？」

「ああ、私は常盤台中学よ」

「常盤台中学？」

「知らない？学園都市の能力開発5本指の1つ。ていうか普通知らないわけないんだけどね」

「学園都市に能力開発？」

「なのは、学園都市も知らないの？」

「はい、全然」

「もう、本当かどうかどうなってるのよ」

そう愚痴る御坂だが、なのはに学園都市についての説明を始めた。

「じゃあまず学園都市から……」

説明中（前話参照）

「学園都市に能力者、風紀委員に警備員……」

「なのは本当に何も知らなかったのね。改めて説明すると大変だわ」

「にははは……。ごめんなさい。それにしても御坂さんすごいんで

すね。超能力者の第3位なんて」

「私なんてたいしたことないわよ。それよりなのはの方はどうなの？その首にかけてるやつ」

「え？」

いきなりの指摘に驚くなのは。首にかけてるものとはもちろんレイジングハートである。服の中に入っているため外からは見えないはずなのだが。

「普通の携帯とかとはなんか違うみたいだけど、それ何？
尋ねてくる御坂に対し、なのはは相棒に相談を持ちかける。

「どうしようレイジングハート。話しても大丈夫だよね？」

「人格的にも信用できる人物ですし、彼女の話が本当なら戦力的にも問題ないでしょう」

「そうだよね」

確認をとる2人(?)を見て御坂は考え込む。

「ペンダント型の通信機？でも電波は出てないっばいし」

「御坂さん？」

「なのは、本当に何なのそれ？」

「その前に御坂さん」

少し改まった様子でなのははそう聞いた

「魔法って知ってますか？」

また1つ

魔法少女と超電磁砲の邂逅が

2つ目の歯車を動かし始める

出会い 魔法少女と超電磁砲（後書き）

文章量どうでしょう？

増やした方がいいのかな？

後書きにコーナーを造ろうと思ってます

やって欲しいことなんかあれば言ってください

今日の伏線っぽい言葉

どうして御坂は無事なんだ

出会い 幻想殺しと守護騎士(前書き)

出会いはこれ入れてあと2話です

出会い 幻想殺しと守護騎士

日が沈み始め夜になりつつある学園都市を上条は歩いていた。

本来ならこの時間はすでに上条は自宅である寮についているのだが、今日は突然現れた炎髪の少女達と情報交換をしていたためこの時間になってしまったのだ。

炎髪灼眼の少女、シヤナはこのことに少し驚きを見せたが、事象として淡々と理解していた。土御門はあまり感情を見せず魔術師としての姿勢で、魔術の説明と現状の推測を話した。

それに上条と悠二達4人は驚愕していた。なぜなら

(いきなり異世界だ、なんて言われてもなあ・・・)

信じられないわけではない。上条自身、学園都市でも魔術関係の事件に関わる稀有な存在だ。大抵のことは納得できるつもりでいた。

だが、科学でも魔術でもない異世界のものだと言われてもいまいち理解できなかった。

(でもシヤナが出した炎、よくわかんないけど能力とは違うみたいだった。土御門も魔術じゃないって言ってたし)

土御門が嘘をついている可能性もあるが、この状況で上条に真実を隠すメリットはない。

(まあ、あいつらが言うには自然現象みたいだから大丈夫か)

それより早く帰ろう、と駆け出そうとしたとき人気のないことに気付いた。今はまだ夕方と夜の間で街が静まるにはかなり早い。ステイル等が使った人払いの魔術を思い出した。突然の非日常に上条は拳を構える。

「なんだあの壁。シヤナが使ってた封絶ってやつか？」

上を見ると空が不自然な色に染まっていた。外からの干渉を阻む壁のように見える。さらに、

「ぐっ・・・うあ・・・！」

という呻き声が前の路地から聞こえ、上条は駆け出した。

「おい、どうした？何があった！」

路地に飛び込むと見慣れない服を着た男が倒れていた。手には長い警棒のようなものがありそう簡単に倒されるとは思えない。

そして立っていたのは、真っ赤なドレスを着た小学生くらいの女の子だった。とても警棒を持った男を倒せるようには見えない。たまたま現場に居合わせたのだろうと上条は考えた。

「どうしたんだ？ここで何があった。こいつは誰にやら・・・」
そこまで言って上条は少女の持つものに声を止めた。

ドレスを着た少女に不自然なほど似合っている、機械的なハンマー。

「ん？なんだよおまえ」

少女はそんな上条に気付いたようで、軽く睨みつけながら声をかけた。

「何もんだ？魔導師じゃねえな、魔力反応もねえし。どうやってこの結界の中に入った。何が目的だ？」

上条は少女の問い掛けを無視して聞き返す。

「何があった。そこに倒れてる男はお前がやったのか？」

「あ？そうさ。魔力持ってるみたいだったから、闇の書のエサになつてもらった。たいした足しにはなんなかつたけどな」

「闇の書？」

「結界に入れるんならおまえもしてるだろ？魔力を666ページ分集めることで所有者に絶大な力を与える『闇の書』。あたしはその守護騎士の一人『鉄槌の騎士』ヴィータ」

ドレスの少女ヴィータは上条の反応を待った。これを聞けば大抵のものは逃げ出すか震えて動けなくなる。だが

「・・・闇の書だって？知るかよそんなもん」

「なに？」

返ってきたのは全く予想だにしないものだった。逃げ出すどころか怒りに満ちている。

「そんなくだらないもんのためにこんなことすんのか。何人も苦しめるのか。そんなこと、許されると思ってるのか！良いわけねえだ

る。そんなもんで手に入れた力を好き勝手に使って良いわけないだろうが!!」

上条から放たれた言葉に苦い顔をするヴィータ。

「おまえに・・・、おまえ何がわかんだよ・・・」

「わかんねえよ。でもこんなこと繰り返しちゃいけないことぐらい、お前にもわかるだろ？」

「っ・・・！そんなの・・・わかってんだ。でもだめなんだよ。集めないといけないんだよ・・・。じゃないとはやてが・・・」

俯いてそう漏らすヴィータの姿はとて小さく年相応の少女のようだった。だが次にあげた顔は怒気に満ちていた。

「あいつつぶすぞ、アイゼン！」

「了解」

自らの相棒、アームデバイス・グラーフアイゼンに問い掛け上条に接近するヴィータ。

振り下ろされるアイゼンは魔力で強化され、生身の上条には一撃すら耐えられない。

回避を諦めた上条はとっさに右手を構える。

意味のわからない行動にヴィータは戸惑うが

（それなら右手に一撃ぶち込んでノックアウトだ！はやてのために殺しはしない！）

全力で当てるために力をこめる。

しかし、ヴィータの考えは裏目にでる。

上条の右手にグラーフアイゼンを当てるということは、

異能の力を全て打ち消す”幻想殺し”に魔法で攻撃するということだ

パァーン、という高い音が辺りに響く。

その光景は何も変わっていない。

しかし、変わっていないからこそヴィータには信じられない光景だった。

「おまえ・・・くつ、何しやがった!!」

アイゼンは上条の右手に阻まれダメージを与えることはなかった。上条は特に苦もなく右手で防いでいる。

「くそつ」

ヴィータは悪態をつきつつ距離を取る。防いだにも関わらず上条から追撃はない。

(幻想殺しに反応した。ってことは異能の力、能力が魔術か、たしか自在法だっけ)

上条はさっきの情報交換で、”紅世の従”やフレイムヘイズのことをシヤナから多少聞いていた。

(どれにせよ、右手が効くならなんとかなる。でも・・・)

「アイゼン、カートリッジロード!」

「了解、ロードカートリッジ」

ヴィータの声に応じグラブファイゼンから薬莢が吐き出される。そして、アイゼンの形が少しずつ変わる。片方には鋭いスパイクが付き、もう一方にはロケットの噴出口のようなものができた。

「んな!?!」

噴出口に火が付き動き始める。アイゼンを持つヴィータを中心に本人を振り回すように回り、そして

「ラケーテンハンマー!!」

そのスピードのまま上条に突撃した。

上条は腕を腰から回し右手を目一杯打ち出す。

「うおおおお!!」

共に一撃に集約した攻撃がぶつかる。

だが、パアーンという高い音が鳴る。

「くそつ、なんだよおまえ!」

ヴィータが叫ぶ。アイゼンは再び上条の右手に阻まれていた。

「っ・・・!!」

だが上条も無傷というわけではなく、アイゼンのスパイクが拳に刺さり血を流している。

それでも本来ヴィータのラケーテンハンマーが作る怪我ではない。

「このっ！」

ヴィータはもう一度距離を取ろうと下がる。しかし上条は離れないように走り右手を振りかぶった。

「ちっ！」

ヴィータは回避を諦め正面に障壁を張った。

「おおおお！」

それでも上条は全力で拳を振った。障壁を無視してヴィータに向けて。

(バカかこいつ。何考えてやがる)

ヴィータはそう思いつつ障壁に集中した。

そして右手が障壁にふれ

パリーンというガラスの割れるような音と共に障壁は粉々になった。

「うおおおおお！！！」

上条の拳がヴィータに向かう。防御手段のないヴィータは恐怖に目を閉じた。

だが、いつまでも殴られた衝撃はなく、誰かに頭を撫でられていた。

「・・・何してんだおまえ？」

「イヤー、泣きそうな子供殴るほど人間やめてないって」

「あたしは子供じゃねー、泣きそうにもなってるねー！」
そうムキになるヴィータが面白いのか、上条はさらに続ける。

「そうだな。ヴィータちゃんは子供じゃないよな」

「ぐぐ・・・このー！とにかくあたしの頭撫でるのやめろー！」

* * *

しばらくヴィータの頭を撫でた後、上条とヴィータは場所を変え向かいあっていた。互いに少しずつ自分のことを話している。

「じゃあ、さっき言ってたはやってっつがお前の主なのか？」

「そうだ、はやってはなめちやめちや優しいんだ。それにはやっての料理はギガうまなんだぞ。そんな・・・」

さっきの上条のなでなで大作戦でヴィータはかなり心を開いたようで、少し前まで殴りあってたとは思わなかった。

「そのはやてが魔力を集めろって言ったのか？力が欲しいからって」

「違う。蒐集はあたしたちが勝手にやってることだ。はやっては、人様に迷惑かけたくないから力はいらねーって」

「だったら、何で？」

そう聞いた途端ヴィータは辛そうな表情になる。

「それを聞いて、どうすんだ。ここの魔導師に言うのか。管理局に知らせるのか！？」

上条の様子をうかがい何か望むような上目遣いをするヴィータに上条は優しく微笑み応える。

「んなことしねーよ。知り合いに魔術師はいるけど魔導師はいねーし。管理局なんて聞いたこともない」

微笑む上条にヴィータはおずおず聞く。

「信じていいのか？」

「ああ、上条さんを信じなさい」

上条の優しい返事にヴィータは少しずつ自分たちと主のことを話し出した。

闇の書というのは魔力を集めることで封印が解かれ主に絶大な力を与える魔導書だということ。自分が闇の書と主を守る守護騎士の一人ということ。今の主は小さな小学生の女の子で力を求めていないということ。少女の足には原因不明の病がありそれが闇の書の呪いであること。そして、その呪いが徐々に上に侵食していること。すなわち、

「このままじゃはやっては近いうちに死んじまう。そんなのやなんだ

！闇の書の侵食を止めるには、闇の書を完成させてはやてを本当の主にするしかねえ。そのためにあたしはさっきの管理局の魔導師をやったんだ」

「そうだあいつ！」

「死んじやいねえ、2・3時間もすれば起きる。しばらく魔法は使えないけど命に別状はねえ」

それに、と前置きして

「はやての未来を汚したくないから殺しはしねえ。でも、それ以外ならなんでもする。そう決めたんだ」

「そうか」

上条は静かに頷いた。ヴィータはその、はやてのことが本当に好きで何をしてでも守りたいのだということが伝わってきた。

「なら、そのはやてに会わしてくれるか。俺にも何かできるかもしれないし、手伝えこともあるだろ？」

「手伝って、くれるのか・・・？」

「ああ、手を伸ばせば届くのに見捨てるなんてしたくないし、知らないところで誰かが不幸になるのは嫌なんだ。それに、泣きそうな子供をほっとくなんてできないさ」

「誰が子供だよ。でも、ありがとう当麻」

そういつて笑って向き合う2人。心なしかヴィータの顔が赤みがかつてるように見える。

「じゃ、俺達は今から仲間だ。だからヴィータの仲間も俺の仲間だ」

「おう！」

「よし、行くぞヴィータ」

「あ、てめえ当麻！あたしより先に行つてどうすんだよ！」

そしてまた1つ

幻想殺しと守護騎士達の出会いが

3つ目の歯車が加速させる

出会い 幻想殺しと守護騎士（後書き）

とりあえず初アクションってことだったんですけど、大丈夫でしょうか？

書いてるときは楽しかったんですけど心配だ
感想お待ちしてます

次回予告

次に出会うは桜色の力と紅い炎
そのとき待っていたのは

出会い 炎髪灼眼と魔法少女(前書き)

投稿遅れましてすみません。

ちよつと家のほうで用事があつて。基本的に金曜から土曜の間で更新しますが、遅れる場合もありますので、ご了承ください。

各物語のキャラの邂逅はとりあえずこれで終わります。とりあえず。

出会い 炎髪灼眼と魔法少女

異変の翌日、時刻は夜11時過ぎ。

なのはは自室で勉強をしていた。

今日も御坂と待ち合わせをして上条を探したのだが見つかることはできなかった。

何気なくなのはは上条という人物について考える。

（上条さんってどんな人なのかな）

何度か御坂の話聞いてるのだが、悪口や愚痴ばかりで実はよくわかっていない。それでも、悪い人ではないことや御坂が嫌な感情を持っているわけではないことはわかった。

（優しい人だといいな。いろいろ教えてもらわなきゃいけないし）
前回の事件で知り合ったアースラにも報告をしたのだが、今すぐには動けないということだった。状況を知るには今のところ上条を探し出して尋ねるしかない。（明日見つかるといいな）
なのはが心で呟いたとき、

「マスター、小規模な結界の発生を確認しました」

レイジングハートが言った。

「小規模な結界？」

「民家を1つ囲む程です。どうしますか？」

うーん、としばらく考え

「行こう。何か知ってる人がいるかもしれない」

家族に見つからないように外まで出てバリアジャケットを着る。

「レイジングハート、セーットアップ」

桜色の光に包まれたなのはの姿は白のバリアジャケットに変わり、空に飛び出した。

「距離800。ここから目視できます」

「うん、あの赤いドームだね」

なのはが見つけたのは紅色のドーム。フレイムヘイズや”紅世の従

”が使う封絶だった。

近くまで来たが中の様子を見ることはできない。

「この中入れるかな？」

「比較的容易なようです」

助言を聞きなのはレイジングハートを構えた。

「デイバインシューター、シュート！」

「Divine shooter」

数発の魔力弾を当てると封絶は揺らぎ中に入れるようになった。

その中でなのはが見たものは、1つの民家とその屋根の上に立つ2人の人影

「この基礎ができていれば、全ての行為は人間を超える」

「ぐっ、がっあ・・・!？」

リボンのような白い布で少年の首を絞め淡々と語る女性の姿だった。

それを見たのははとっさに魔力弾を放つ。

「ダメっ、シュート!!」

桜色の魔力弾は正確に少年、悠二の首を絞めるリボンを断ち切る。

「ぐっは！ハアハア・・・」

首の拘束が解かれ屋根に転がる悠二。

「いったい何者でありますか」

突然の横槍、正体不明の相手に女性、ヴィルヘルミナ「カルメルは対峙した。

なのはは咳込む悠二に気を向けつつ名乗る。

「時空管理局外部協力魔導師、高町なのはです」

「時空・・・管理局？」

「民間人への武力行使は犯罪です。お話を聞かせて下さい」

話をしようとするのだが、ヴィルヘルミナは聞く耳を持たない。

「これは我々フレームヘイズの問題、部外者には関係ないのであります」

「そんな、それじゃ・・・！」

「邪魔をするなら」

なのはの主張を遮りヴィルヘルミナは続ける。

「排除するまでであります！」

「っ!？」

「flush move」

リボンによる一撃を一瞬の高速移動で避けるなのは。

その隙にヴィルヘルミナは再び悠二を拘束する。

「ダメだつてば！」

なのはも魔力弾をコントロールし、リボンとヴィルヘルミナ本人を狙う。

「くっ・・・！」

しかしヴィルヘルミナも別のリボンでこれを防ぐ。防いだリボンは桜色の火の粉となって散った。

「もう一回！ダイバインシューター」

なのはは数発の魔力弾を生成し放ちかけて、バガン、

「!!!」

屋根の上に誰かが降り立ちリボンを断ち切った。

「っなにしてるのっっ!!!」

怒声をあげるのは、なのはとあまり変わらない背丈に炎髪をなびかせる、シヤナだった。

突然の事態に戸惑うなのはだが、フレイムヘイズ達は止まらない。

「もう一度、聞く・・・・・・なにしてたの」

「この者に、体術における”存在の力”の繰りを教示していただけであります」

「実地演習」

(演習・・・、あんなに辛そうだったのが!?)

悠二が死んでしまいそうな程苦しんで見えたものを、ヴィルヘルミナは演習だと開き直った。

「ヴィルヘルミナなんか・・・」
「シャナはあまりに悲しくて、怒りが湧き上がった。」
「？」

「ヴィルヘルミナなんか、大嫌い！！」

「な」

「え」

啞然とするヴィルヘルミナを無視してシャナは悠二を抱き上げる。

「痛っ、痛いつてシャナ」

「我慢して、飛ぶから」

といつて飛び封絶を出したシャナ。それを見たなのはは

「え、えと・・・」

「追いかけてみましょう、マスター」

「うん」

固まるヴィルヘルミナをおいてシャナを追いかけた。

* * *

「悠二、寒くない？」

「シャナのほうこそ」

「わ私はフレイムヘイズだからいいの」

少し前は話し掛けづらい雰囲気、見逃さない程度になのはは離れていたが和らいだ様子を感じ声をかけた。

「すいませーん、少しお話しいいですか？」

いきなり声をかけられたことに2人は驚いたが、なのはを見て安堵した。

「さっきの・・・」

「きみか、さつきはありがとう。おかげで助かったよ」

「あついえそんなこと。それより」

悠二のお礼に少し謙遜したが、すぐに本題を思い出し問い掛けた。

「お二人はいつたい何をしてる方何ですか？」

「え？」

あまり要点を得ない質問に悠二は思わず聞き返してしまった。

「えとつまり、さつき言ってたフレームヘイズとかって何ですか？」

「そういうことか。どうするシャナ？」

「問題ないと思う。土御門元春達にはもう話したし。どうアラストール」

「よかるう。坂井悠二が助けられた件もある。何より我らも情報が欲しい」

「わかった」

「その前にシャナ、窮屈だ」

「うん」

シャナは答えて軽く悠二を放り投げた。

「うわおっ!？」

空中でジタバタする悠二を笑って抱えるシャナ。その動作をアタフタしながら見ていたなのはだがそこで1つ気付いた。

「どうしたの、悠二」

「あの〜シャナ、ちゃん？」

「何？」

尋ねようとしたなのはにシャナはキョトンとする。

「えと、そのコートの下。わわわ」

「はは・・・シャナ、お風呂入ってたんだっけ」

目を背ける悠二と腕をワタワタさせ慌てるなのは。月光の下で2人の顔は赤くなっている。

「え？」

シヤナは2人が何を言っているのかわか

「あ！」

わかった。

「み見た。何見たの！何見たのか言いなさいよ！」

「見てない何も見てないいだだだ！」

「じゃあなんで目をそらしたの！」

抱き上げた状態からそのまま締め上げるシヤナ。

「見てない見てないだだだ、いやちよつとだけ足が、それ以外いだだだ、死、死ぬ、実は胸元、上から、ちよつとだけだだだ、死ぬって！？」

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！」

「シヤナちゃん、落ち着いて!？」

本気で苦しそうにする悠二を見てシヤナをなだめるなのは。

「もつよかるつ、シヤナ」

「うー」

アラストールの言葉に不満そうに絞めるのをやめるシヤナ。

「怪我は零時になれば治ろう」

「怪我が・・・治る？」

疑問に思ったなのだが悠二達は特には気にせず

「そついえば、説明まだだっけ」

「見せた方が早い」

と言って悠二のポケットに入ってたアラームがなった。

「きた。つてよく壊れなかったなこれ」

「・・・どじ」

「うん」

悠二の体を見ると体中のヴィルヘルミナにやられた傷が全て治っていた。

「治った」

「当然だ」

短く言う2人になのはは混乱する。

「えっ傷が、治って・・・!?!」

「説明するから落ち着いて」

優しくいう悠二。そしてシャナは頼むように言う。

「できるなら明日から、ヴェルヘルミナから悠二を守るのを手伝って欲しい」

(・・・明日から?)

「どうしたの?」

「なんだ」

「?」

3人の視線に、悠二は夜空の中脂汗をかく。

「い、いや、その・・・」

悠二の回復に満足げなシャナは、笑って答える。

「なに?」

「怒らないで、聞いて欲しいん、だけど」

「うん」

「・・・明日、僕は、吉田さんとファンシーパークに、その、出かけるらしい、ですよ・・・?」

悠二は、なぜか笑顔のままのシャナに、仁王の憤怒する様を連想した。

「ふうん、そう」

あくまで笑顔のまま、シャナは抱えていた悠二を、落とすた。

「ツーーーーー.....」

判別つかない言い訳を残しながら、悠二は雲の底へと落ちていった。

「シャナちゃん!?!助けなきゃ!」

慌てて追うのはをシャナは止め、

「大丈夫、ギリギリで止めればいい」

「でも・・・」

「それより」

ゆっくりと悠二を追いかけながらこう言った。

「説明してあげる。」紅世の従”と私達フレイムヘイズの、世界の
本当のこと」

また歯車

炎髪灼眼と魔法少女の出会い

いくつもの歯車が動き出し

物語がその姿を見せる

*ちなみに悠二は地面スレスレで救助されました

出会い 炎髪灼眼と魔法少女（後書き）

どうにもアクションというか、戦闘が淡泊になる。そして短い。次話から本格的なストーリーです。気付いてる人もいると思います。が、まずはあの人です。どうなるかな。

複線的なあれ

誰が混ざった世界が3つだけなんて言ったかな？

まあほとんど出ませんけど

激突 フレームヘイズと魔導師（前書き）

大分遅くなりました

すみませんm（――）m

激突 フレイムヘイズと魔導師

世界の異変から2日後、11月第3土曜午後。

なのはと御坂の2人は本日も上条を搜索しに街を練り歩いていた。

「あーもう！つたくどこにいんのよあのバカ！」

なかなか見つけることができずイライラしている御坂。

「2日も探して見つからないなんて、なにかあったのかな？」

なのはもそれなりに疲れた様子で首を傾げ考える。

「何かつて・・・、まさかあいつまた別の女の子と！」

「また？」

「あのバカ困ってる人はほっとけないとかで、かなりの人数を不良から助けたりいろいろしてんのよ。で、助けるのが十中八九女の子ってわけ」

「えと、それは・・・」

苦笑するなのはは話題の転換をこころみる。

「そもそも、直接ケータイとかで連絡してみるのはどう？」

御坂はその提案に頬を掻く。

「えっと、私あいつのアドレス知らない・・・のよねー」

でも今更聞くつてもなんか・・・、など下をむいて言う御坂になのはは困ったように笑うしかなかった。

そして、

「マスター、結界の反応。先日と同じものです」

「それって封絶のこと？シヤナちゃん達？」

「おそらく」

「御坂さん！私ちよつと急いでいつてくるね。説明は後で！」

駆け出して行くのはにあわてて声をかける御坂。

「ちよつと、なのは！どこ行くのよー！」

「ファンシーパーク！御坂さんは待つてて」
そう言つて近くの路地に入つて行くのは。

「待ちなさいつて、なのは！」
後を追つて路地に入る御坂だが、すでになのははバリアジャケットを身に纏い空を飛んでいた。

「すごい……。あれがなのはの使う魔法」

目の前の光景に見とれる御坂だが

「……つてそんな場合じゃなかった！ええと、大戸ファンシーパークだっけ？」

状況を思い出し、なのはの飛んでいった方向に走つていった。

* * *

御坂と別れたなのはは全速力で大戸ファンシーパークに向かつていた。

「距離30・・・20・・・」

目視で見える紅色のドームは先日よりおおきくアトラクションを易々一つ覆い隠しているようだった。

「（この中にシャナちゃんと悠二さんが・・・）
デイベインシュートー、シュートー！」

なのはは杖を軽くふり数発の魔力弾で封絶に穴を空け侵入する。

中であつたにはアトラクションと思われる建物ひとつ。

さらにその中から大きな力がぶつかりあつているのを感じた。

先に進みなのはが見たものは、剣を手に構えるシャナと、仮面を着けたたずむヴィルヘルミナ。

* * *

(炎による最強の一撃を最初に叩き込む)

シヤナは大太刀『贄殿遮那』に炎をまとわせ振り上げる。

(それで全てを見せる。見せて認めさせる)

身のうちにある“存在の力”を瞬時に練り燃烧させる。

(私は、『炎髪灼眼の討ち手』は、間違っつてなんかいないと)

まさに全力の一撃をぶつけるため。

受ければ存在の維持すら難しいだろう。

それほどの熱量を持っていた。

「すごい炎・・・」

思わずなのはそうもらした。ヴィルヘルミナを心配しそちらに視線を移したが、彼女の表情に焦りはなくリボンを前方に備えているだけ。

それを見たなのは嫌な予感がした。

「レイジングハート！」

「」

急ぎ備えるなのは。

だが、数秒遅い。

「・・・だあつ!!」

シヤナはヴィルヘルミナならぎりぎりで耐えてくれるだろうと予想していた。

「・・・」

そう、あまく見ていた。

「・・・!?」

ヴィルヘルミナが繰り出したのは白い半球状のリボンの塊。

表面には桜色の自在式が見え、シヤナはのヴィルヘルミナ考えとともに、その効果を看破する。

(反射!?)

とっさに炎の放出を止めるが間に合わない。

幾重にも夜笠を体に巻き身を守るシヤナだが防ぎきることはできない。

だが、炎の奔流は

「助けたい」

「Divine」

それを上回る桜色の閃光によって

「届いて！」

「Buster」

掻き消される。

なのはの放った砲撃は、リボンで作られた半球ごと炎をまとめて消し去った。

その威力を前にヴィルヘルミナはもとよりシヤナと悠二も驚きを隠せない。

（今の魔法……。なんか、想像と違うけど凄い威力……。！）
ただただ目を丸く悠二だが、無傷とはいかなかった。飛び散った瓦礫などにより傷ついていた。

一方シヤナは自らの炎に体中いたるところに火傷を負い、床の上に倒れていた。

「また貴女でありますか」

ヴィルヘルミナは射線上のなのはを見つけそうだった。

「これはフレイルムヘイズの問題、部外者には関係ないといったはずであります。なのになぜ再び邪魔をするのでありますか」

表情を仮面の下に隠したのは目をむけるヴィルヘルミナ。だがその構えには警戒がみられ動揺しているようにも見えた。

「事情は聞きました。悠二さんのことも、『零時迷子』のこともレイジングハートを構えながらなのはは答える。

「それでも私は悠二さんを守ります。ただ知ってる人を……。友達を守りたいんです！フレイルムヘイズとかトーチとかそういうのは関

係ないんです！」

あつて間もないものを、人間ではないものを、少女は『友達』とそう呼んだ。

「だからシヤナちゃんの話聞いてあげてください！話し合いで解
決できるはずですよ」

熱心に訴えるのはだが、ヴィルヘルミナから返ってくるのは恐ろ
しいまでの冷たい言葉と、攻撃。

「これ以上の言葉は必要ないであります！」

その瞬間ヴィルヘルミナの放つリボンが数本なのはに向かう。

「protection」

「くっ！」

後方に距離をとりながら防ぐのは。しかし、室内で思ったほど離
れない。

強力な砲撃や誘導性の高い魔力弾での長距離攻撃を得意とするなの
はに、狭いアトラクションの中での戦闘は向かない。

「くっ！」

ヴィルヘルミナと対等に戦うのはを見て、シヤナは自らを奮い立
たせる。

（私が悠二を守る。私の強、さをヴィルヘルミナに認め、させる！）
だが直撃をまぬがれたとはいえ自身の全力の一撃。体のいたるところ
が焼け体がフラつく。

決して碎けることのない大太刀『贄殿遮那』を杖として体を支えヴ
ィルヘルミナを見た。

「ゆ・・・さない」

立会いながらヴィルヘルミナは仮面で表情を隠しそれを聞く。

「ゆる、さない」

「結構・・・」

静かに答えるヴィルヘルミナ

「・・・やめて」だの『許して』だのという、哀れみを請うよう
なことを言ったなら、すぐにそのミステスを破壊していたでありま

す

「……!？」

なのはと対峙している以上それは難しいはずだが、それほどの覚悟の元であるということだろう。

「守らねばならないであります、完全なるフレイムヘイズを」

「……勝手なこと、ばっかり!」

声の切りとともに、シャナの両足が爆発し驚異的な加速を産む。

悠二に向かうリボン目掛けて大太刀の切っ先が走る、
が

一瞬でその切っ先が、ふわり、とリボンに包まれる。刺突の勢いを殺さず力のベクトルにわずかに変え、恐ろしい勢いでシャナを後方へ投げ飛ばす。

「私に不意打ちは効かないであります」

「無駄」

しかし、投げ飛ばすならばわずかながら隙が生じる。

そのわずかな時間さえあれば、もう一人の少女は砲撃が撃てる。
魔導師

「いくよ、デイバイーン」

「Divine」

「バスター!!」

「Buster」

放たれる桜色の閃光

はじめの一撃ほどまではいかないが、魔力弾とは比べものにならない威力（比喻でなく）。

「うつ……!」

ヴィルヘルミナは束ねたりボンでわずかに射線をそらし身をひねることで直撃をさける。だが防いだりボンはすぐに焼け落ち、本人をかるく接触した。

「……っはあ！」

そして、それを見たシャナはヴィルヘルミナにせまる。
が「万条の仕手」はこの程度で戦いの流れを見誤らない。

「炎髪灼眼の討ち手」懇親の刺突、何の工夫もない、気力を込めた
であろう、最後の一撃。その先端を捉え先ほどと同じようになげ飛
ばした。

床に転がるシャナを見て彼女は勝利を――

「危険っ！！」

ヴィルヘルミナは気付いていなかった。

彼女の正面、先ほどまで倒れていた少年が、見慣れぬ大剣を、真っ
向から振り下ろしていた。

(が、甘い!!!)
ドン、

と、はこの斬撃を、ふれる寸前の距離で、リボンを交差させ受け止
め、今度こそ勝利と、

錯覚する。

(……………はあああああ!!!)

悠二はその身に宿す莫大な“存在の力”を大剣「フルートザオガー吸血鬼」に注ぎ叫
ぶ。

この剣の力、“存在の力”を注ぎ込むことで触れた敵の体を切り刻
む。

それが、並の“絶世の徒”をはるかに凌駕する悠二の“存在の力”
を注がれ、ヴィルヘルミナに襲い掛かった。

バツ、

と血が、宙に舞う。

「あーっ……!!?」

「姫!？」

ティアマトーの叫びが一瞬遠くに聞こえ、無数の傷にヴィルヘルミ

ナ意識は闇に落ちる。

* * *

「よかったです。無事お話できた見たいで」

「結局両方とも実力行使だけだね」

「しかもやりすぎ」

吉田の言葉に、苦笑する悠二と軽く睨みつけるシャナ。

「でもホツとしました。みんな無事で」

フレ임ヘイズは大抵の怪我はすぐに治る、と聞いてなのはは一層安堵した様子だった。

「なのはー！」

遠くから呼ぶ声を聞いてなのはがそちらを向くと、御坂が走ってこちらにやってくるどころだった。

「心配したのよ。大丈夫……ってこの人たちボロボロだけど、どうしたの？」

「あーん、えと、あはは……」

苦笑いをしてなのははこの顛末を説明した。

~~~~~説明中~~~~~

「ふーん、その人たちがねえ」

「はい」

「てことはなのは、あんた随分と壮大な親子喧嘩に首突っ込んだわけね」

「うう……、ごめんなさい」御坂の追及に謝りだすなのはだが、御坂はそんなこと気にしてもいない。

「良いわよそんなの。その吉田さん含め頭数は揃ってるみたいだし、無事だったんでしょ？」

「うん」

「だったらいいのよ。それより、今度からこういうときはちゃんと私に言いなさいよ。これでも超能力者レベル5の第3位なんだから」

その言葉にその場の殆ど（ヴィルヘルミナ以外）は驚きを見せた。代表するように悠二が問い掛ける。

「ほんとに君が第3位の超能力者？」

それに御坂は無然として答える。

「そうよ。常盤台の『超電磁砲レベルガン』って言えばわかるでしょ、ってそういえばそっちの人達は？」

御坂の新しい疑問に、それを悟ったのはが答える。

「シヤナちゃんと悠二さんはあの時の異変わかってるみたい」

「吉田さんもね」

「ヴィルヘルミナは？」

補足する悠二と、ヴィルヘルミナに確認をするシヤナ。

「異変とは一体何のことですか？」

「情報提示」

「わかってないみたいね」

説明を求める1人で2人のフレームヘイズ。

彼女と1番親交のあるシヤナが説明を始める。

「今はまだここにいない人物の仮説でしかないんだけど」

真剣な表情でヴィルヘルミナを見るシヤナ。

「複数の世界が一つになった、そう考えるのがいいらしい」

.....

「は？」

ポカンとするヴィルヘルミナを見て

「まあ、普通はそういう反応よね」

御坂がそう呟いた。

激突 フレームヘイズと魔導師（後書き）

遅れてすいませんでしたm(\_\_\_\_\_)m  
今後更新が不定期になりかねませんが  
気長に待って下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2181u/>

---

とあると灼眼と魔法少女

2011年11月2日02時20分発行